第九部会

史的ダルマ論の試み

—— 生没年の秘密 ——

宮村 重 徳

史的ダルマ論は三つの問いからなる。菩提達摩が誰か、一人の祖師になぜ二つの伝承体があるのか、理想化と理想型解釈の地平が如何にであるかに注目する。歴史的個人については、年代・肖像・思想の三点に的を絞って論究する。複数ダルマ説を取る。

『落陽伽藍記』⁽¹⁾が語る菩提達摩はペルシャ系外国人僧で「百五十歳」、この説を堅持しつつダルマ伝承体の再構築を試みる。「二つのダルマ」像が合致しない、矛盾が露わになるだけとすれば、可能な選択肢の一つとして、生没年の定説・異説で該当する人物がいまいか探せばいい。十の条件で対象を更に絞り込む。ビザンティン帝国時代に、名を捨て歴史から自らを隠して生きることを余儀なくされたNが浮上する。「孤独な海外の遊行僧」(柳田)が誰であれ、ペルソーナに於いて働く存在の意味地平は、己を隠す仕方⁽²⁾で顕れる。

史的ダルマ論は、後期ヘレニズム世界の平行現象に着目した、史的ダルマとその共鳴体の理解社会学的研究である。歴史に名を残した人のイメージは、書き残されたモノを手掛かりに

その作品世界から文献解釈学で再構成出来る。しかし某かの理由で歴史から消されたか、敢えて名を捨てることで歴史から自らを隠して生きることを余儀なくされたヒトのケースではそうはいかない。既存の達磨伝に「すべて創作され捏造された」(関口)⁽³⁾との疑いが持たれ、歴史改竄の疑いも指摘されている。討議はいよいよ混迷化し、祖師のクラウドイメージの一人歩きに歯止めが掛からない。既存の達磨伝に新発見の敦煌文書を加えて分析総合判断しても断片化に拍車⁽⁴⁾が掛かるだけとなると、最早文献解釈学の手⁽⁵⁾に負えない。歴史的個人の主観的動機と意味連関の解明は、ウェーバーの理解社会学による。

ポジティブに対してネガティブの対称面から全体を捉えて初めて、史的ダルマのペルソーナに於いて働くモノとヒトの意味連関が、名実共に全体世界のイメージに於いて解釈可能となる。歴史から自らを隠して生きたヒトの真実に迫り、祖師の事跡を理解可能な行為として対象化する為には、理解社会学に依る高次の分析総合判断が必要となる。西洋合理主義に偏らない相補論的な理解の枠組み、東洋的合理性を見開きの対称面に収めた、「理解社会学のコンプレメンタリズム」⁽⁶⁾を提唱する。

史的ダルマ論で壁観九年の何故(動機)が理解可能となる。また、壁観するヒトの目配せから四つの発行が要請されるとき、悟りを得る為の難行苦行を一切必要としない、目的合理性を全く意識させない仕方(安心にして「すでに」無為⁽⁷⁾)で成し遂げられる。これも「諒解」ゲマインシャフト関係⁽⁸⁾を前提とした立派な社会言論である。面壁と公案は、形而上学的言論批判としての二重の課題(「言葉の上限と無の下限」⁽⁹⁾、大島)と一

致する。

史的ダルマは王子の達磨多羅やダルマトラータでない、インドですでに「外国人僧」で有る可能性を排除しない。ヒントはヤヴァナの海路でなく、ペルシャ系商人が行き交う陸路にある。「二入四行論」の「壁観」は四念処批判、繰り返される第一人称の「我」の語法に、「史的ダルマの告白」が聴かれる。「報怨行」は、仏説三行への「庭前」を構成する。

(1)『落陽伽藍記』水経注(平凡社)、『落陽伽藍記校釈』(周祖、科学出版社)一三頁以下。(2)関口真大『達磨の研究』(岩波書店)、「結語」の三六七頁以下。(3)拙著『理解社会学のコンプレメンタリズム』試論(法政大学『多摩論集』二〇〇八年)。(4)マックスウェーバー『理解社会学のカテゴリー』(海老原・中野訳、未来社)七七頁以下。(5)Yoshiko Oshima(大島淑子)『Zen—Anders Denken?: Zugleich ein Versuch über Zen und Heidegger, Verlag Lambert Schneider, Heidelberg 1985. S. 53ff., 83ff. (6)柳田聖山編『達磨の語録』(禅の語録1、筑摩書房)三一頁以下。同『ダルマ』(講談社)参照。

起塔を通じた永遠の積尊の感得

——『法華経』のブツダ観——

鈴木 隆 泰

『法華経』(Saddharmapundarika)のブツダ観としては、

「仏舍利塔(ストウパー)」「法華経」そのもの」「法華経」の法師」に加え、「如来寿量品」に説かれる、いわゆる「久遠実成の積尊」という、無量の寿命を有する釈迦牟尼仏が有名である。これらのうち、前三者はそれぞれ「塔・遺骨」「経巻」「法師」という具体的な対象を通してブツダを直接的に確認・感得することができるのに対し、最後の「久遠実成の積尊」については、古来『法華経』の中心思想の一つと見なされてきたにも関わらず、「如来寿量品」が具体的な記述を欠いていたこともあり、その確認法・感得法に関する学術的考察は、管見による限りほとんど行われてこなかったように思われる。しかるにこの度『法華経』の教説を再検討した結果、『法華経』に散見される「起塔」に関する記述が、無量の寿命を有する積尊の確認法・感得法の具体的教示となりうる可能性が浮上してきた。

『法華経』には仏塔に関する記述が随所に存在しており、先行研究はそれらを(一)仏舍利塔の建立・供養を勧奨するもの、「(二)仏舍利塔の供養を禁止し、仏舍利なしの塔の建立を勧奨するもの」、「(三)多宝塔と如来の分身に関するもの」の三種に大別している。これらのうち、(一)と(三)は他の先行研究の考察結果に譲ることとし、本研究では専ら、「如来神力品」「法師品」「分別功德品」に見られる(二)に関わる記述を辿ることによって、当該可能性の検証作業を行った。以下に検証結果を提示する。

『法華経』は仏舍利塔(ストウパー)と仏舍利なしの塔(チャイトヤ)を明確に区別した上で、『法華経』実践の場にストウパーではなくチャイトヤを建立せよと繰り返し命じている。